

戦前における障害児保育に関する研究

—保育問題研究会機関誌『保育問題研究』の記述を整理して—

愛知教育大学 小川 英彦

I. はじめに

戦前の障害児保育の実践と研究をめぐっては、保育問題研究会第三部会と恩賜財団愛育会愛育研究所で活動が行われていた。筆者は、本『幼児教育研究』第13号において「戦前の障害児保育と三木安正」と題して、三木安正（1911年-1984年、以下三木と称する）の戦前での障害児保育に果たした役割を明らかにした。本研究はその継続研究として、三木が所属した保育問題研究会とその機関誌『保育問題研究』に焦点化して、戦前の障害児保育の展開を整理することを目的とする。

II. 保育問題研究会機関誌『保育問題研究』と第三部会の役割

保育問題研究会は1936年に城戸幡太郎（以下城戸と称する）を会長として設立され、『保育問題研究』はその機関誌にあたる。『保育問題研究』は、1937年10月に創刊され1941年3月までに通巻37冊が出されている。菅忠道がその編集の中心となり、三木は創刊号より執筆をしている。なお、同機関誌の停止後には『保育問題研究会月報』が1943年4月まで10号出ている。

同研究会は「児童研究の理論的活動を日本の児童の健全なる育成のための実践的活動に於ける諸問題の解決に役立てたい」⁽¹⁾という趣旨から立ち上げられ、科学的究明をめざす科学主義と子どもの生活に根ざした保育をめざす生活主義のふたつを研究理念としていた。創刊号で示された方針にもとづいて、6つの部会が旺盛な活動を展開していくが、第三部会は特殊異常児・困った子供の問題などを扱い、その責任チューター（指導者）が三木であった。この第三部会の研究方針は次のようになっている。①理論的研究：異常児及び幼児の病理、心理並びに教育に関する講話、文献の紹介。②実際研究：保育の実際家より、取り扱いに困る子供の事例を報告し、専門家を交え相互に批判討論し研究された処置を実践すると共に、その経過報告をなす。③調査活動：幼稚園・託児所に於いて取り扱いに困る子供に関する諸種の問題を調査研究する。これら3つの中では、特に②に重点が置かれ研究と実践のリンクがなされていた。⁽²⁾

III. 保育問題研究会機関誌『保育問題研究』における障害児保育の展開

1. 第1巻第1号において⁽³⁾

保育問題研究会が発足して1年が経過したところで、「保育問題研究会は何をして来たか」と題して第三部会の活動報告を以下のようにまとめている。

4月22日第一回、東京帝大医学部附属脳研究室に於いて研究方針の協議会を開き、その大綱を決定し、幼稚園・託児所における問題児の調査に関して討論した。出席者は11名。

5月24日第二回、研究発表は横山綾子による教育的見地から克明に記録された日誌と創意に充ちた方法からの「観察日誌について」、三木による「精神薄弱児に就て」であった。出席者は14名。

6月29日第三回、研究発表は三木による「性格異常児に就て」、海卓子「困った子供の一例報告」であった。ここでは城戸から「困った子供に対して執った保母の教育的処置と、その反応・効果の記

録こそ貴重」という示唆的発言がなされた。続いて、「困った子供の調査表」が示され、市内の幼稚園・託児所で配布調査することが決定された。出席者29名。

なお、本号においては、アメリカのフォスターとヘッドレイのふたりによって執筆された『幼稚園の教育』の第19章（「特に注意を要する子供の取扱い」と題する）が横山ミトによって紹介されている。ここでは20のケースをあげ、社会順応力を目的にした教育方法にふれているが、特に、治療しうると否とに拘らず、本人をして常に幸福に生き抜くためには、善良な市民としての共同生活を営めることを力説している点に注目できる。そのケースでは、①びっこの子、②異様な容貌の子、③文化程度の低い異民族の子、④不完全視力の子、⑤難聴の子、⑥体質虚弱の子、⑦不完全言語の子、⑧心身の発達がやや遅れている子、⑨精神遅滞の子、⑩優秀児、⑪左利きの子、⑫行儀の悪い子、⑬じっとして居られぬ子、⑭気が散り易い子、⑮無責任な子、⑯すぐ弁解する子、⑰あばれん坊、⑱気の弱い子、⑲過敏な子、⑳野卑な言語を遣う子といった行動特徴を列挙している。

また、中村孝子による「幼児の喧嘩の取扱い方に就て」も報告されている。

2、第1巻第2号において⁽⁴⁾

第三部会から「子供の喧嘩の研究に就て」が報告され、当面の部会の研究対象として、子供の喧嘩を取り上げ、多くの保母の分担と協力により科学研究を継続させようとする方針が述べられている。

10月26日の部会について、三木の「幼稚園・託児所に於て取扱いに困る子供の調査報告」がなされ、①本調査の意図並びに内容の説明、②まとめ方に就て、③報告・内容、④学的な診断の順に進められ、中でも保母が調査した62名の問題児の事実在即した詳細な報告がされている。出席者14名。

3、第2巻第1号⁽⁵⁾

城戸が「幼児教育の研究法」の中で、困った子供への対策として如何なる条件から生じたものかを、子供の素質に関するもの、保育に関するもの、家庭生活に関するもの、社会生活に関するものなどの視点から明らかにする必要があるとしている。

「東京市虚弱児童転住保育に参加して」では、就学前に健康児の域に達せしめる目的から、体格異常児、体質異常児、栄養不良児、潜伏性結核児、病後回復順調ならず慢性の経過をとれる者50名を対象として、千葉県にある東京市養育院安房分院での生活プログラムとその所感が述べられている。

11月24日の部会について、三木からエリスハルト・グリーン、ヘレン・ダウェ、青木誠四郎の著書の紹介があり、子供の喧嘩の心理をつかみ、ケースによっては連続的系統的な観察実験及び記録にもとづく研究法が提起されている。他に観察日誌についても若干記述されている。出席者17名。

4、第2巻第2・3号⁽⁶⁾

2月22日の部会について、大羽昇一の「幼児の研究と観察記録の方法に就て」を紹介している。次いで、「入園時に調査すべき項目」に関して市内十数か所の幼稚園で使用している入園に際しての諸種の調査項目の批判と、部会としての新たな見解を加味した原案が討議されている。出席者11名。

3月9日の部会について、保育記録に関する討議と城戸の近刊である『社会的行動と児童の個性』が紹介されている。出席者30名。

5、第2巻第4号⁽⁷⁾

子供の喧嘩を見つけ、仲裁や叱責など何らかの対応をした場合、その直後に用意したメモにその実

際を符号により記録し、それをたよりに保育時間終了後にカードにできるだけ詳細に再現する方法が大羽・三木・横山により提案されている。出席者22名。

6、第2巻第6号⁽⁸⁾

5月25日の部会について、波多野完治から「子供の喧嘩と自我の成立」の話がなされている。ここでは、喧嘩は少なくとも3-4歳から始まり14-5歳にいたって一段落すること、自我の著しい成立を機縁としていることなどがふれられている。また、城戸より喧嘩は欲求の性質を深くつきとめなければならないという意見が出されている。出席者20名。

7、第2巻第8号⁽⁹⁾

三木による「喧嘩とその処置(1)」が述べられている。ここでは、①喧嘩に関する諸家の研究を学ぶこと、②実際の経験を集めること、③進んで組織された意企の下に実験的方法をとることの方法論のうち、特に②と③が今後の課題であるとしている。また、庄司豊子から二つの事例が報告されている。

6月24日の部会について、『教育』(岩波書店)4月号に発表した「幼稚園・託児所で取扱いに困る子供の調査」の批判と今後の研究に関して城戸よりコメントがあり、1～2の事例に対して部会で検討することが提起されている。出席者10名。

8、第2巻第9号⁽¹⁰⁾

7月13日の部会について、城戸の『就学前児童の闘争』が紹介されている。託児所での54名の幼児を対象にして、観察により幼児の闘争的行動についての考察を行ったものである。闘争の種類を4分類した上で、闘争の原因として、社会的経済的状況、知能、運動場の広さと設備、先生の数とその干渉などをあげている。部会としては、処置の方法に力点を置いて進めていくことが課題とされている。山村きよから喧嘩の観察記の提出、庄司豊子から問題児の報告もされている。出席者10名。

9、第2巻第10号⁽¹¹⁾

三木による「喧嘩とその処置(2)」が述べられている。ここでは、研究会で取り上げられた「戦争と保育の問題」に関連して、喧嘩の記録の中から戦争ごっこについての報告が、ある講習生と横山ミトから2事例がなされている。

10、第2巻第12号⁽¹²⁾

断片的知識の切り売りになることを避け、日常の保育の間に問題を発見する目を養ひ、それを解決していく力を培ふことを主眼に、加えて、日本の保育革新運動の温床となり、真に日本的な幼児教育科学樹立の一助となるために、保育問題講座の開講をしている。第一期として11月から3月までを法政大学児童研究所で開催して、児童心理学の基礎的諸問題を中心に編成されているが、第三部会からは三木の異常児の問題(1)(2)が取り上げられている。

11、第3巻第1号⁽¹³⁾

三木による「喧嘩とその処置(3)」が述べられている。ここでは、庄司豊子と垣内京子からの託児所の乳児室での事例を報告している。子どもの喧嘩は物を中心とした争いが多いとされるが、自我の

成立と密接に関連していることを主張している。そして、子どもの社会的態度は環境によって影響されることをドロテア・マッカーシーの「幼児の社会性の発達の導き方」という論文より引用している。特に、社会性のない、自信のない子どもの例をもちだして、環境の中でも遊び道具の配慮に託児所での反省を促している。

12、第3巻第2号 ⁽¹⁴⁾

恩賜財団愛育会愛育研究所の開設が紹介され、「幼稚園・託児所めぐりその11」として愛育研究所の前景・乳児保育室・乳幼児検査室・児童室の写真を掲載している。

13、第3巻第3号 ⁽¹⁵⁾

「恩賜財団愛育会愛育研究所の開設」と題して、その組織と建物の紹介をしている。保育問題研究会の多数の会員が愛育研究所のスタッフであること、中でも三木が第二研究室において伊藤良子とともに、異常児の研究、言語異常の問題にあたっていること、牛島義友が嘱託として乳幼児発達検査の完成、言語発達標準の問題を担当していることが述べられている。

それと、第三部会の当面の研究として、①新入園児の取ひに困った点の観察記録、②取扱ひに困る子供の保育日誌のふたつを掲げている。この点については、一般に家庭より幼稚園・託児所なる社会生活に入った場合、その当初には色々な問題を起こすであろうが数週間の後には消滅すべきものであり、それがいつまでも消えぬものが所謂問題児として残るわけであるから、そこで第二の問題児の取扱ひについての研究が始まり、その為に保育日誌が用意せられるとしている。いわゆる問題児への対応として①と②をあげて、三木が愛育研究所との連携で研究を進めるように進言している。

14、第3巻第4号 ⁽¹⁶⁾

三木の「異常児の問題（一）一主として精神薄弱児について」の論文が掲載されている。『岩波教育学辞典』より異常児あるいは問題児の分類を紹介した後、託児所には精神薄弱的なものが多く、幼稚園には性格的な欠陥、特に社会性の欠陥からくる問題児が多いと指摘している。個々の問題への対応として精神薄弱の原因についての知識が必要であること、どのくらいの割合で占めているのかをアメリカの「児童の健康と保護に対する白亜館会議」より引用した上で、日本では異常児の者が非常に多いのに対して施設がかなり少ないこと、現在の教育的怠慢が社会に及ぼす迷惑といった観点から力説されている。また、将来的に特殊幼稚園の設立が課題であるとしている。

15、第3巻第5・6号 ⁽¹⁷⁾

三木は「異常児の問題（二）一主として精神薄弱児について」の論文で心理的特徴と教育の両側面に関して述べている。心理に関する研究として城戸の「児童に於ける特殊なる知能の構造」より抹消実験と置き換え実験をふまえて、精神薄弱児の教育には、反復学習せしめることと具体的な経験を豊かにしていくことを提起している。そして、その学習の根底には彼らの要求や欲求を重んじることが述べられている。子どもの実態把握にあたっては、まず相手の様子を知ることが第一歩であって、どの程度のことが出来、どのようなときには困り、どのようなときには困らぬかということを確かめる必要さ、保母は断片的ではなく全体を通じてその子どもの特性を知る必要があって、家庭の理解と協力を求めなければならないとしている。

同情とか保護は出発点の段階であって、理想的にはもっと積極的に人的資源の開発という見地から

の対策が講じられなければならないとしている。

部会について、三木より会員に今後の研究に向けて、問題児の記録用紙及び保育日誌が配布されている。

16、第3巻第7号⁽¹⁸⁾

阿部和子の「海からの便り一虚弱児童転住施設参加記一」と題して、東京市社会局が5月から7月にかけて横浜市磯子区所在麻布臨海学校に開設した虚弱児童転住施設の東京市金澤保育所の記録が紹介されている。保母に対して、虚弱児童の概念、結核児童の概念、転住保育に必要な保健衛生の知識を授ける必要があるとしている。

17、第3巻第9号⁽¹⁹⁾

保育問題研究会が発足して3年を経過したので、保育問題研究会研究主題一覧と『保育問題研究』既刊号総目次が所収されている。前者において第三部会に注目してみると、1937年には研究方針協議（4月）、観察日誌と精神薄弱児について（5月）、性格異常児と困った子供の一例（6月）、取扱上注意を要する子供（9月）、取扱に困る子供の調査報告（10月）、喧嘩の観察記録（11月）、1938年には幼児研究と観察記録法（2月）、児童の社会的行動と個性（3月）、喧嘩記録の蒐集法（4月）、喧嘩の心理学（5月）、取扱に困る子供の調査批判会（6月）、就学前児童の闘争（7月）、喧嘩の記録批判（10月）、1939年には問題児記録日誌と調査表（4月）、問題児保育記録（9月）となっている。後者において第1巻第1号から第3巻第8号までの三木や第三部会などの執筆名があげられている。

18、第3巻第10号⁽²⁰⁾

財団法人中央社会事業協会と恩賜財団愛育会が主催した全国児童保護大会（1939年10月12日から14日）の概要が整理されている。この中で関係のある障害児関係をあげてみると、協議部門としては第三部が疾病、虚弱並心身欠陥児童保護となっており、各府県社会事業協会から151の問題が提出されたが、その中で特殊児童保護のしめる割合は36の問題で約24%となっていて一番多く占められている。その内訳は、心身欠陥児保護、精神障害児保護、身体障害児保護、精神薄弱児保護、虚弱児保護、結核児保護、先天性梅毒児保護となっている。また、対策案としては、精神障害児保護では精神薄弱児特別教育令の制定、精神薄弱児保護法の制定、身体障害児保護では肢体不自由児童特別教育令の制定、肢体不自由児童保護法の制定、盲・聾・言語障害児の教育・保護、視力保存の普及並徹底、聴力保存並徹底、虚弱児保護では地域的保護事業（都市、農村）、一般的保護事業、緊急保護事業があげられている。

第三部会について、「保育日誌の記録に就て」と題して三木より記録上の注意があったあと、実際の取扱ひに困った幼児の問題が話し合われている。出席者7名。

19、第3巻第11号⁽²¹⁾

保母生活調査委員会からの「保母生活に関する調査」が載っている。これは、保育問題講習会を契機にその資質向上のために実施された調査である。注目に値するのは、保育ニ当ツテキテ自分ニ足りナイト思フ教養ノ方面という問いに対して、特殊児童ノ取扱ヒ方が第一位となっていて、幼稚園では35.1%、託児所では28.8%に及び、保育経験年数においては3年未満が18.2%、3-10年が18.1%、10年以上が15.4%となっている。そして、色々な変った子どもが一人でも居ることによって、一組の集団

的の取扱い方がどれ丈阻まれるか、集団と背馳する子供の取扱い方が一層問題となってくる、そのような問題のための教育は恐らくどこでも授からなかったであろうと投げかけている。

研究会自体の会員数が多くなってきたため、新機構が打ち出されているが、第三部会は、問題児の個別的指導研究を目的に、その中心となるスタッフに山村きよ、庄司豊子、佐藤峯子、岡眞澄、渡邊千代子、吉田愛子、三木の名前がみられる。

第三部会について、環境の異なる幼稚園と託児所では問題もかなり相異しているので、多人数にならないようにそれぞれの場で会合をもち、時に法政大学で全体の会合を開いて報告し連絡することとしている。出席者5名。

20、第4巻第5号⁽²²⁾

第二回保育問題夏季研究講座の開催についての案内があり、研究発表会では互いの研究と実践を交流する目的で、青木誠四郎が問題児を（委員は山村、庄司になっている）、三木が自由題を（委員は井手、村山、佐藤になっている）担当し指導的立場から司会になって講評と特別講演をしている。問題児の取扱いでは、集団生活に馴れない子供、乱暴で困る子供、神経質な子供の処置、喧嘩の取扱い方など、保育日誌の中から拾ひ上げればいくらかも問題があるわけで、それらの苦心が集められ研究されて行けば、ただ困る困るといって匙を投げている状態ではなく、このやうな子供こそ幼い頃によくしようといふ気持ちがわいてくると述べられている。

21、第4巻第6号⁽²³⁾

第二回保育問題夏季研究講座の報告があり、研究発表会の問題児では、青木誠四郎の司会のもとで、海卓子（麻生幼稚園）の「問題の子供と其の家庭」、岡本竹子（麻生方面館）の「劣等感をもつ支那の子供」、副島ハマ（平安幼稚園）の「泣いた子供の記録」、三木（愛育研究所）の「新入園時に見られる色々の問題」、増渕穰（東京府保導協会）の「問題の少年の幼児」が報告されている。城戸の傍聴があり緊張した発表会であった。

また、三木は研究発表準備委員長の立場から、「研究発表会及び協議会の跡を顧みて」と題して、参加者163名の中で、日本の保育界を推進して行く為の一つの足掛りが出来たと結んでいる。

22、第4巻第7号⁽²⁴⁾

第二回保育問題夏季研究講座の問題児の4人の実際の報告が整理されている。それらを受けて司会の青木誠四郎が「問題児の処置法について」をまとめている。そこでは、問題の起こった原因と経過をみることに、特に家庭での様子を観察することが大切とされている。そして、処置の方法としては、一つの仮定を立てて、原因と考えられる点を除去して環境を調整していくこと、出来る丈多くの事例を集めて記録し、その中には共通性があるのでこれを抽出することで問題児のある程度までの指導法が進むと指摘している。

Ⅳ. おわりに

筆者は、先に三木が戦前の障害児保育に果たした役割について、①生活をつぶさにみようとした点、②保育の実際を非常に重視した点、③障害それぞれの程度に応じた指導の場を設定する必要性を主張した点、④心理学、保育・教育学、社会福祉学、医学といった諸科学の視点に立つと同時に、保育者とともに日常的に意見交換でき、チームワークの場を求め展開した点にあると論じた。⁽²⁵⁾

この三木という人物史研究から明らかになった点をふまえて、以下に頭書の研究目的であった保育問題研究会機関誌『保育問題研究』での展開をまとめるが、本研究では今日的な障害児保育につながる点に関しての考察をしながら、同研究会第三部会の先駆的な貢献を評価しておきたい。

a、対象にした子どもについて

知的障害児、性格異常児、言語障害児のほかに保育をする上で困った子どもを扱っていることがわかる。特に、戦前には一般的に表されていた「異常児」というカテゴリーについて、第三部会においては精神薄弱や性格異常や言語障害が含まれていた。加えて、虚弱児を含めて園でみられるいろいろな問題を示す子どもを困った子どもと称していた。機関誌(22)や機関誌(3)の取り上げ方をみると、明らかに障害があると診断できる子どもからそうではない子どもまで幅広くとらえられている。今日的に言えば、気になる子ども、特別なニーズをもつ子どもたちを対象にしていたと評価できよう。

また、問題が起こった原因については、機関誌(5)にあるように素質・保育・家庭・社会といったトータルな視点にたって求めていくことと、原因を取り除き環境を整備することが述べられている。機関誌(24)にあるように障害や問題行動を個人だけに還元するのではなく、環境とのかかわりできとらえ、まわりの社会的条件を整えることで障害や問題行動を軽減させることができると考えていたと読み取れよう。今日的に言えば、バリアフリーのとらえ方になる。

b、観察と記録について

徹底して観察と記録という研究法を貫いていることが明らかである。つまり、問題となる子どもの記録用紙と保育日誌が活用されていたのである。そして、指導にあたっては、数多くの観察と記録よりある一定の仮説をたてること、数多く集めた事例には共通性があることから、そこから一定の指導方法が見出せることが重要視されている。この点は、きわめて教育的見地に立った指導方法であると評価できよう。機関誌(7)にあるように、そのやり方にも一段と工夫を凝らしていたと考えられる。今日的に言えば、実践記録による保育研究方法の確立を追っていたといえよう。こうした第三部会での問題児への対応は、他の部会を交えての保育問題研究会全体に伝えられていることから、まさしく科学的な研究方法に依拠した、日本の幼児教育科学樹立をめざしていたのである。第三部会が対象とした子どもはけっして一部の特殊な子どもの問題ではなく、日本の幼児教育科学を打ち立てていくための不可欠な普遍性をもった問題として位置づけることができると評価できよう。

c、発達をとらえる視点について

機関誌(19)でもまとめられているが、第三部会の特徴として継続して行われていたのに喧嘩の研究があげられる。ここでは、喧嘩の心理をつかむこと、殊に自我の成立と深く関連していることが強調されている。子どもの発達していくプロセスの中で、喧嘩という行動をつかむ必要があるといった心理学視点とつきあわせて日々の指導をしていくことが重要視されている。ここには、著名な心理学者が研究会のスタッフに布陣されていたことと密接なかかわりがあった。心理学と教育学のリンケージを求めていたのであった。第三部会で強調されていた観察研究と、先行する理論研究の合体でもあった。さらには、この観点は、問題行動を単に現象的にみるのではなく、子どもの発達する姿にそってみるといった今日の障害児保育での子ども理解にも合い通じるものがあると評価できる。

d、園の先生たちのニーズに寄り添って

第三部会の出席者をみると、いつも一定数の先生たちが積極的に参加していることがわかる。機関誌（21）にあるように保育士の力量形成のために実施された調査では、特殊児童の指導方法へのニーズが第一位になっていることから、保育の難しい子どもへの保育内容と方法についての悩みがこの時代も横たわっていたと思われる。そして、機関誌（16）にあるように特殊幼稚園の設立を社会に呼びかけるとともに、幼稚園と託児所でのそれぞれでの調査を行うことで、子どもたちの置かれた状況にそくした有効的な指導、発達を促す最善の方策を模索しようとしていたのである。今日的に言えば、分離保育（セグリゲーション）と統合保育（インテグレーション）の両面を子どもの実態に応じて必要であると示唆していたと理解できよう。

最後に、今後の研究課題として、『保育問題研究会月報』、『教育』（岩波書店）に所収されている三木らの論述を整理する必要があると残されている。それと、『異常児保育の研究』紀要第3輯（1943年）を初めとする恩賜財団愛育会愛育研究所での三木を中心とした活動をまとめることも必要である。以上の研究を積み重ねることで、全体像がみえてくるからである。これらについては継続研究としたい。

なお、本研究の資料調査にあたっては、愛知教育大学と日本福祉大学の附属図書館の関係者に文献の閲覧ではたいへんお世話になったことをここに感謝申し上げたい。また、本研究については研究ノートであることを付記しておく。

【 引用文献 】

- (1) 『保育問題研究』第3巻第9号、1939年10月。
- (2) 浦辺史『保育問題研究・児童問題研究7 保育問題研究4』復刻版、pp.1-14、1978年。
- (3) 『保育問題研究』第1巻第1号、1937年10月。
- (4) 『保育問題研究』第1巻第2号、1937年11月。
- (5) 『保育問題研究』第2巻第1号、1938年1月。
- (6) 『保育問題研究』第2巻第2・3号、1938年4月。
- (7) 『保育問題研究』第2巻第4号、1938年5月。
- (8) 『保育問題研究』第2巻第6号、1938年6月。
- (9) 『保育問題研究』第2巻第8号、1938年8月。
- (10) 『保育問題研究』第2巻第9号、1938年9月。
- (11) 『保育問題研究』第2巻第10号、1938年10月。
- (12) 『保育問題研究』第2巻第12号、1938年12月。
- (13) 『保育問題研究』第3巻第1号、1939年1月。
- (14) 『保育問題研究』第3巻第2号、1939年2月。
- (15) 『保育問題研究』第3巻第3号、1939年3月。
- (16) 『保育問題研究』第3巻第4号、1939年4月。
- (17) 『保育問題研究』第3巻第5・6号、1939年6月。
- (18) 『保育問題研究』第3巻第7号、1939年7月。
- (19) 『保育問題研究』第3巻第9号、1939年10月。
- (20) 『保育問題研究』第3巻第10号、1939年11月。
- (21) 『保育問題研究』第3巻第11号、1939年12月。
- (22) 『保育問題研究』第4巻第5号、1940年6月。
- (23) 『保育問題研究』第4巻第6号、1940年7月。
- (24) 『保育問題研究』第4巻第7号、1940年8月。
- (25) 小川英彦「戦前の障害児保育と三木安正」（愛知教育大学幼児教育講座『幼児教育研究』、第13号、pp.1-6、2007年）。